

柳田國男

妹の力



妹
の
力

一

此春は山の桜のちようど咲き初めた頃に、久しぶりに生れ在所に還^{かえ}つて、若い人たちの為に大いに風景の推移を談じた。日本の歌や文章では、「古里は昔ながら」とながめるのが、一つの様式の如くなつてしまつたが、少なくとも自分の三十何年前の故郷には、殆ど以前を忘却せしめる程の变革がある。川は全く新たなる水筋を流れて長い板橋が架かり、曾^{かつ}て魚を釣り又は水を泳ぐとて、

衣類を脱ぎ掛けた淵の上の大岩は、小石原のまん中から
円い頭だけを出して居る。赤土の日に映じて居た周囲の
山々には、頻しきりに樹を栽うえ草を茂らせて、外線が何れも
柔かになった。雨や霞の風情もきつと美しくなつて居る
ことと思う。家も瓦葺かわらぶき瓦庇かわらびさしが多くなつて、見馴れぬ
草木が移し植えられて成長して居る。諸国の旅を重ねた
後に始めて心づいて見ると、我村は日本にも珍らしい好
い処であつた。水に随したがう南北の風透しと日当り、左右
の丘陵の遠さと高さ、稲田に宜しき緩やかな傾斜面、仮
に瀬戸内海の豊かなる供給が無かつたとしても、古人の

愛して来り住むべき土地柄であつた。繁栄の条件は昔から備わつて居る。従つてややともすれば生れ過ぎ居り余り、楽しい生活に執着するばかりに、争うまじき人々が争い且つ鬪つた。歎きつつ遠く出て往つた者もあれば、去る能^{あた}わずして苦しみ悩む者も実はあつた。それが今日の如く昔に立ちまさつて美しい緑の山水の中に、能^よく悠揚平和なる生存を持続するの術を学んだとするならば、必ず住民の性情にも、近年顕著なる変化があつたに相違ない。来ては直ちに還り去ること、恰^{あた}かも盆の精霊のような自分には、それを見出すことが困難である。どうか

語って聴かせて下さいと、旧友たちに頼んで見たことであつた。

土地に住んだままで年を取った者には、それ程明白なる外景の変遷すらも、実は今までは心づかずに過ぎたのである。ましてや父と子、祖母と孫娘との心持のちがいが、同じ進化の道を辿るものたどの本と末とであつて、一は消え去り他は新たに現われる時代の氣風であつたことを、どうしてそうたやすくさと覚ることが出来よう。只強いて求めて以前は無かつたことを列挙するならば、是は定めて全国一様の現象でもあろうが、村々にも利口な人が

多くなつた。貧しい家々に生れた者でも、たやすくあきらめて分に安ずると云う癖が無くなつた。古い型を守つた勤勉が、必ずしも安全の道で無いことが会得せられた。そうして又鉄道電話の類が頻りに新しい機会を田舎にも運んで来て、特にえらい奮発をして郷里を飛出さずとも、自然に外部の金で村に居て富むことが出来た。それは運などと謂うものよりは遥かに的確な原因ではあつたが、やはり数限りも無い智慧技術の中から、兼々適当な選沢をして居た者が成功したので、大体に於て居住地とは縁の乏しい都市や遠方の国に働く人と、共通した経験を持

つて居る方が都合がよかつた。其結果として、最も居心地よく村に住んで居る者が最も村の事情に疎く、一番村人らしく無い人が、近所隣と競争しようと思ふ故に、却つて村の安寧を支持するといふことが、見ようによつては近頃の変化かも知れぬ。新しい愛郷心が形を具えて来る迄は、斯ういう冷淡とよそ心とが、僅かに田舎の生活に余裕を与える。人が世間師と為り地方文化の伝統を軽んずるようで無かつたなら、小さな盆地の生業は夙に自給に十分ならず、已む無く烈しい争奪を以て、一部の友人を此安楽郷から外へ突き出そうとしたことであろう。

それがともかくも互いに打ちくつろいで、静かに一同が養われて居るのである。古い物のはらはらと壊れて行くのも、其代価としてならば致し方が無い、と謂つたような考えを持って居る人もあつた。

自分などもそれでいいのだと実は思つて居る。我々が少年の頃は田舎がずっと長閑のどかで、鳥も多く来て啼なき、山には鹿猿が遊んで居たけれども、人の浮世の楽しみは、今の最も不幸な者よりもまだ少なかつた。今の貧者は比較に由つて不満は感ずるが、慰藉いしやもあり希望もあつて、倦うむこと無く子弟を教育して居る。そうして此子弟の大き

くなる頃には、又一段の変遷の来ることが予期し得られる。曾ては我々が余りに日本人であつた為に、久しく匿かくれ埋もれていた居た「人間」が、時来つて終ついに其姿を顕わした如く、やがては又荒海の岸から引返して、寂しい旅人は其故郷を訪ねて来るであらう。少なくとも浦島の子の惑いを抱いて、玉の櫛くしげ笥を開いて見ようとするであらう。或は其時節がもう来て居るのでは無いかとさえ思われる。物に紛れて暫らく忘れ遠ざかつて居たが、島に数千年の国を立てて居た民族で無ければ、到底持ち伝えられない古くからの習わしが、一朝にして消え失せる道

理は無かつたのである。眠が思い掛けぬ夢を誘つて来るように、無心に生活の営みを続けて居ると、却つて端々から昔の「日本人」が顔を出すのを、今までは単に心付き考えて見る者が無かつただけでは無いか。我々が新たな時代の癖、又は突発した奇現象と認めて居るものの中にも、由緒あり因縁があつて、しかも学問の力の今なお之を解説し得なかつた類が多いのではあるまいか。例えれば自分の郷里の郡などでは、林野の保護が行届いて、山がいつの間にか上代の所謂青垣山と為つたが、戻つて来て之を見て驚歎きょうたんする者は、自分の如き三十何年前の村

人だけであつて、今一つ古い世の人には、それは久しく見馴れたる常の姿であつたに相違ない。しかも年代記や覚え書の類は、如何なる場合にも常の姿を書き残そうとはしなかつた。それと同様にあまり有りふれて居た為に、却つて多くの凡人生活が不明になつて居る。今見る此地方の氣風のうちで、何れの部分が新しい変化であり、どの部分が暫くは潜んで居た古い本性の再現であるかは、単に之を見分けようとする志が有るのみで無く、自分のように様々の町や田舎をうろついて後に、年経て還つて来た物珍らしさの眼を以て、比較をする者の判断が必要

であつたのでは無かろうか。もしそうだとすれば人の生涯は短かい。また此次にと延期をして居ても当てが無い。何なりとも今諸君が心付かれることを、話して聴かせてもらいたいものだとも言つて見た。

二

そうすると追々に色々な話が出て来る。他の地方ではどうか知らぬが、人が全体にやさしくなつたような感じがする。殊に目につくのは子供を大切にする風習である。

以前は野放しにして置いて、自然に育つ者だけが育つという有様であつたのが、もうそんな気楽な親は少なくなつた。一家の生計から考えても、子の為に費す所の入費が、学校にかける金を除いても、相応に多くなつたように思われる。此辺の農家では昔から牝牛を飼つたが、乳を搾^{しぼ}ることが出来るようになったのは、森永の大きな工場が川の岸に建てられた、ほんの少しく前からである。今では早天に一朝も欠かさず、自動車^{えいじ}が村々を廻つて牛乳を集めて居る。嬰兒^{えいじ}の死亡率が少なくなつたのは、それから以後の著しい現象であるが、如何に価の安い牛乳

でも、買って飲ませて乳の不足な子を養おうとするのは、先ず以て親心の大きな変化であつたという。なる程そう聞けば同じ情愛が、小学校の児童の服装などにも現われて来たことは、必ずしも特に生計の豊かな或地方には限らぬようである。

それからまだ一つ意外であつた話は、兄妹の親しみが深くなつて来たと言ふことである。其中でも兄が成人するにつれて、妹を頼りにして仲よく附合ふことは、今は殆ど世間一様の風であつて、しかも以前には丸で知らなかつたことであると言ふ。始めて思い當つたことだから、

まだ説明の材料も備わらぬが、見ように由つては幾通りにも其原因が考えられる。何にしても興味ある問題であると思う。

或は此現象を解釈して、婦人解放の一過程と見ようとする者もあるだろうが、それも決して誤りでは無い。男女の差別を厳にした近世儒教の法則は、特に女性に向けて過酷であつたが、それは必ずしも国民全部の家庭を支配しても居なかつた。しかも二間ある家ならば、必ず女の領分は奥の間の方であつて、引込めば引込んで居るだけゆかしがられたことは事実であつた。支那などではマ

トロンと為つて後、亭主を鞭うつほどの勇敢な婦人でも、娘の頃、妹たる時は皆極度に貞淑であつた。貞淑と云う語は無表情を意味して居た。今も上流の間に折々残つて居る如く、絶対に何物でも無いかの如く、見せかけるのが技術であつた。誠に詮も無い流行ではあつたが、既に名づけて女のたしなみとも謂う通り、言わば若い娘のそれが趣味だったので、必ずしも外聞が之を強いたので無く、又一生の間公私を通じて、女の習性を一変してしまふ程の大なる主義でも無かつた。単に昔は兄などと馴々しく、物を言うようではいけなかつた迄であると思

う。

古来の風俗画を見て社会生活の一端を窺おうとする人が、常に不思議に思っていることが一つある。絵巻物の美人は、いつでも一本の線で切れ長の眼を描かれて居る。降って浮世又平時代の精細な写生に於ても、艶麗なる人は必ず細い眼をして或一方を見つめて居た。それがいつの代からの変遷であつたか、「女の目には鈴を張れ」などと、大きな円味のある眼を以て美女の相好の一とするに至つた。如何に時世の好尚が選択するからとて、一つの民族の間に此までの面貌の差異を生ずる筈が無い。

必ずや人間の技術乃至は意図ないしを以て、天然の遺伝を抑制した結果だと思ふ。自分の家にも多くある女の兎の中に、兄が自動車さんなどと綽名あだなを与えた、目の大きなのが一人ある。之に就いて実験をして見ると、結局は大きくも小さくも出来る目を、頻々と大きく見開いて居るのであったことが判った。本来の形状は何とあるうとも、力つとめて之を円くする機会を避け、始終伏目がちに、額とすれすれに物を見るようにして居る風が流行すれば、誰しも百人一首の女歌人の如く、今にも倒れそうな恰好かつこうを保たしめて、其目を糸に画かねばならなかつたのである。そ

れが時あつて顔を昂^あげ、まともに人を見るような態度を是認するに至つて、力ある表情が始めて解放せられたので、多分は公衆に立ちまじり、歌舞などに携^{でんぱ}わつた者の趣味が、只の家庭にも伝播したのである。

同じような変化はなお服飾などの上にも現われる。例えば最近まで眼に触れた女の抜衣^{ぬきえ}紋^{もん}は、勿論直接の原因は髪^{たば}の形、即ち無暗に長く突出した鬘^{たば}を保護するに在つたらうが、そういう形を考案して、顔の後部を裝飾しようとするに至つたのも、やはり眼を細くして居るのと同じ趣旨から、始終此部分を白く長く、露出することが流

行して居た為で、黒髪を長く垂れて居た時代が過ぎると、所謂襟足はしとやかな娘たちの一番大切な外貌となつて来て、之を美しくする為に色々の趣向が立てられたのである。ところが僅かな年数の間に都市村落を通じて、そんな点に辛苦する者はもう殆ど無くなつた。病気ででも無い限りは前ごごみの、伏目受け口などであるく娘を見かけず、何れも襟を搔き合せて頭を天然の高さに復し、前に現われる物なら何でも見ようとする態度を以て、去来するのを通例とするようになった。日本ではまだ色々の不満を指摘せられて居るが、是などは正しく教育の力

であつて、一般に妹の兄との交際を可能にし自由にしたのも、亦其結果であらうと自分は思う。

ただし此解説が理由の全部であるとは思わぬが、仮に婦女子が必要も無い謙遜から放免せられ、各自その天性の快活を以て家庭を明るくし、殊には孤独を感じ易い青年の兄たちを楽しませしめるのだとしても、それは結構なる変化だと考え得る。ところが今日の物知りには、卑俗なる唯物論者が多く、此の如き兄妹間の新現象を以て、単純なるエロチシズムの心理に帰せんとし、一方には又常習の悲観家なる者が之と合体して、往々にして之に抛

つて解放の弊をさえ唱えんとするように見える。しかし其観察は明瞭に誤つて居る。仮に兄弟の交情の底の動機に、若い者らしい又人間らしい情熱が潜んで居たとしても、世には是ほど無害なる作用が果して他にも有るだらうか。無害と云う以上に此の如き異性の力は、屢々しばしば他の悪質の娯楽から、単純なる人々を防衛して居る。あらゆる生物は言わずもあれ、人類の社会に於ても、新たなる家の分房の行わるる迄の期間、決して相とつぐこと能あたわざる男女の群が、斯こうして互に愛護して最大の平和を保つて居た。それが即ち家庭であつた。その至つて単純な

る元の形に、戻つて来たと言ふまでであつて、言わば我々の肉親愛の復古ではなからうか。

故に之を名づけて愛情の解放と呼ぶまでは差支えないが、其動機の推察にあまりに深入して、たとえ仮令有り得べからざる危険を憂慮せぬまでも、往々に其自由を無用視しもしくは輕蔑しようとする者があるならば、それこそ囚とらわれたる昔風である。母なども以前の尋常の家庭に於ては、はかばかしくは人中に立ち交らず、成長した息子たちの之に向つて、打ちとけた心持で女が女同志、又は男が男ばかりでするような世間話をして居る所などは、外

から来た者には曾て見かけられなかつた。いつでも怒つて居るのかと思うような簡単な、ぶっきら棒の応答をするのが、父でも夫でも男たちの普通の態度で、女は又そうせられるのを当然として居つた。是は必ずしも母や妻の趣味ばかりでは無かつた。遠い昔から女には色々の禁忌があつて、漁獵戦争の如き男子の專業には、干与し能わざる厳しい慣習のあつたのが、本の意味が不明に為つて、いつしか此様な形式をとるに至つたのである。薩摩の如きはつい近い頃まで、婦人を憎みきらうことを以て、強い武士の特徴として居たこと、西洋のシバルリーとは

ちようど正反対で、戒律のやかましい聖道の僧などよりも、更に過ぎたるものがあつた。堂々たる男子が僅かの接近を以て、すぐにめめしさ柔かさにかぶれるものと信じた筈が無い。きたないとか穢よごれるとかいう語で言い現わして居たけれども、つまりは女には目に見えぬ精霊の力が有つて、砥石としいしを跨またぐと砥石が割れ、釣竿つりざおてんびんぼう天秤棒りよりよくをまたぐとそれが折れると云うように、男子の膂力りよりよくと勇猛とを以て為し遂げたものを、たやすく破壊し得る力あるものの如く、固く信じて居た名残に他ならぬ。其様な奇異の俗信がもう無くなつて、漠然たる畏怖のみが永く留

まり、元来親しみ馴れて相愛すべきものが、うわべは少
なくとも疎遠なる形式を保つて、この新時代の活々とし
た世の中に入って来たのである。そんな無用の垣根の撤
せられたのは、至つて自然なる結果であつて、今まで之
を予期しなかつたのが迂遠うえんなくらいのものだ。

三

しかし現実には決して此話ほどに簡単では無い。禁忌は
之を知らない国の人々が想像するように、徒いたずらに我々を

拘束する迷信では無かつたのである。社会の或一部分の便宜の為に、強いて設けられた律令と謂うことは出来るが、本意は寧ろ未知の外界に対する一種の対抗策で、他の力弱き動物などが常に危害の大小を測りかねて、遁走とんそうと潜匿せんとくとの為に生涯の半ばの力を費して居るのに反し、一定最少限の条件をさえ守って居るならば、人は自在に行動して何の怖るる所も無いものだと言ふことを、我々が確信し得たのも此御蔭で、言わば人間の勇氣の根源を培うものであった。勿論誤つたる判断推論が、無くともよかつた幾つかの拘束を、後生大事に保存させたことは

事実だが、それは今日の議院と雖いえども免れない。全体から見て其時代の、どうしても必要だと認めたものが慣習と為り、之を破れば一般の不安を感ずる間は、人は之を守らざるを得なかったのである。人間の智慧には不確かなものが多い。此不安を追払うことは容易で無かった。婦人を明りに近づけず、又多くの男の仕事に参与せしめまいとしたことは、我々の眼には理由の無いことであるのみならず、又その最初の経験も忘れられて、今では之を説明する者も無い姿だが、それでもなお此頃の如き変化に遭遇すると、彼等自身にも解し難い気遣わしさの為

に、首を傾け眉を顰めひそめようとする老翁などのあるのは、何かよくよく底深い惰性の、元の力として潜んで居る為では無いかとも想像せられる。

自分たちの学問で今までに知られて居ることは、祭祀さいし祈禱きとうの宗教上の行為は、もと肝要なる部分ことごとが悉く婦人の管轄であつた。巫みこは此民族に在つては原則として女性であつた。後代は家筋に由り又神の指定したがに随つて、彼等の一小部分のみが神役に従事し、其他は皆凡庸を以て目せられたが、以前は家々の婦女は必ず神に仕え、ただ其中の最もさかしき者が、最も優れたる巫女みこであつたも

のらしい。国の神は一つ以前には地方の神であり、更に
さかのぼ 遡れば家々の神であつたのみならず、現在に至つて
 も、家には尚專屬の神があつて、季節もしくは臨時に祭
 られて居るのを見ると、久しきに亘つて此職分は重要で
 あつた。而うして最初此任務が、特に婦人に適すと考え
 られた理由は、その感動し易い習性が、事件ある毎に群
 衆の中に於て、いち早く異常心理の作用を示し、不思議
 を語り得た点に在るのである。雋しゅんびん敏なる児童の中に
 は、往々にして神を見、神託を宣する者はあつたが、成
 長するにつれて早く特性を失う上に、斯んな子を生み育

てるのもやはり女だから、女は常に重ぜられた。殊に婦人の特殊生理は、此の如き精神作用に強く影響した。天然と戦い異部落と戦う者にとっては、女子の予言の中から方法の指導を求むる必要が多く、更に進んでは定まる運勢をも改良せんが為に、此力を利用する場合が常にあったのである。故に女の力を忌み怖れたのも、本来は全く女の力を信じた結果であつて、あらゆる神聖なる物を平日の生活から別置するのと同じ意味で、実は本来は敬して遠ざけて居たものようである。

そんな待遇をする必要が、もう殆ど無くなつた近世ま

で、場合によつては尚かよわい者の力が信ぜられた。独り物を害する魔性の力だけでは無い。或種のまじないには女を頼まねばならぬものがあつた。年々の行事で最も著しいものは田植である。昔の人の推理法は興味がある。女は生産の力ある者だから、大切な生産の行為は女に頼むがよいと云う趣意であつた。之に伴なうて色々の儀式の、至つて古風なものが今も残つて居り、従つて又神秘的なる禁忌があつた。一方には又おみき・おなおと云う類の老女の、神と交通したと云う話が実事として数限りも無く語り伝えられる。實際其不可思議には数千年の根柢

があるので、日本の男子として之に動かされることは聊いささか

 かも異例で無かった。世外的の宗教は大規模に持込まれ
 たけれども、我々の生活の不安定、未来に対する疑惑と
 杞憂とは、仏教と基督教とでは処理し尽すことが出来な
 かった。現世幸福の手段としては不十分なる点が見出さ
 れた。而うして其欠陥を充すべき任務は、太古以来同胞
 の婦女に属して居たのである。倭やまと姫ひめの命のみことの御祭祀ごさいしが単
 なる典礼になつてしまふと、光明皇后や中将姫の祈願が
 始まつたように、一つの形が不十分となれば、第二の方
 法が考えられなければならぬ。故に兄の寂寞を妹が慰め

るのも、言わば此民族の一続きの大なる力の、一つの新しい波に過ぎないのかも知れぬ。

四

最近に自分は東北の淋しい田舎をあるいて居て、はからずも古風なる妹の力の、一つの例に遭遇した。盛岡から山を東方に越えて、よほど入込んだ山村である。地方にも珍らしい富裕な旧家で、数年前に六人の兄弟が、一時に発狂をして土地の人を震駭しんがいせしめたことがあった。

詳しい顛末は更に調査をして見なければならぬが、何でも遺伝のあるらしい家で、現に彼等の祖父も癡狂してまだ生きて居る。父も狂気で或時仏壇の前で首を縊くって死んだ。長男がただ一人健全であつたが、重ね重ねの悲運に絶望してしまつて、屢々しばしば巨額の金を懐に入れ、都会にやつて来て浪費をして、酒色によつて憂を紛まぎらそうとしたが、其結果は是もひどい神経衰弱にかかり、井戸に身を投げて自殺をしたと云う。村の某寺の住職は賢明な人であつて、何とかして此苦悶を救いたいと思つて、色々立入つて世話をしたそうだが無効であつた。此僧に尋

ねて見たらなお細かな事情がわかるであろうが、六人の狂人は今は本復して居る。発病の当時、末の妹が十三歳で、他の五人は共に其兄であつた。不思議なことには六人の狂者は心が一つで、しかも十三の妹が其首脳であつた。例えば向うから来る旅人を、妹が鬼だと謂うと、兄たちの眼にもすぐに鬼に見えた。打殺してしまおうと妹が一言謂うと、五人で飛出して往つて打揃つて攻撃した。屈強な若い者がこんな無法なことをする為に、一時は此川筋には人通りが絶えてしまったと云う話である。

鈴木正三の因果物語の中にでもありそうな話である。

仏者などに言わせると、必ず一応の理由はつくと思うが、単なる狂暴の遺伝以外に、別に古来の異事奇聞の、多くの例に共通した何等かの法則が潜んで居る様な感じがする。仮に此等の狂人が今少しく平和なものであつて、鬼を見る代りに神仙を見、乃至ないしは著聞集の狩人が箭やをつがえて射たと云う如き、三尊来迎の御姿を見たのであつたらどうであらうか。近世の俗人たちの不思議奇き瑞ずいの分類法は、実はあまりにも単純であつた。平素より多病多感なる一人が、夢と現うつの境に有り得べからざることを見たと説くが如きは、之を幻覚なりと謂い又は誇張妄信な

りとして、耳を仮すまいとするけれども、三人五人が打揃うて現に目撃したと謂う場合には、乃すなわち舌を巻いて驚歎しようとしたのである。素朴一様の生活をした昔人は、心理も亦略々ほぼ同じ傾向を持って居り、利害も趣味も感情も相似たる結果、似たような誤謬ごびゆうを経験することは有り得べく、殊に前に掲げた例のように、其間に強い統一の力の現われ得ることは明らかだが、未だ之を考えた人は無いらしいのである。

是も奥州に例の多い座敷童子ざしきわらし、或はクラボツコとかスマツコワラシとか、色々の名を以て呼ばれる童形の家の

神は、其姿を見たという者に証人を出し得る話が多い。関口善平と云う人は少年の頃、数人の友だちと共に、隣家の座敷で此神の舞い跳るを見たと言ふ。普通に髪を耳のあたりまで切下げて居ると云うに反して、たしかに坊主頭であつたと云う一点を除く外、衣服などの事を今尋ねて見ても、正直な人だから単に記憶せぬと言ふ。小児の淡い考え方では、其当時一人一人に就いてただして見ても、聴きようによつては皆うんと答え、やがて又そう記憶してしまつたかも知れぬが、精確に記述させたら必ず若干の喰違ひのあることを、どれも是も一樣であつた

様に信じてしまう場合が多かろう。例えば日本全国に亘って誰でも説くことは、天狗倒してんぐだおなどと称して白昼に山の中で、大木を挽ひき伐きり倒す音であるが、是などは全部落の者が同時に之を聴いて、後に其辺に往って見ると何の痕あとも無いのが例であつた。都会に於ては夜ふけて囃子はやしの音をきくことがある。場所方角は一定せず、しかも一時に多勢の者が、あれ又今夜も遣つて居ると、言う場合が多いのである。斯こう云う簡単な、しかも曾かつて聞いた印象の深い音響の再現は、何千人に共通しても之を幻覚と認めることが出来る。鉄道の開通した当時、時刻でも無

い時に汽車が通り、或は其笛の音、車の響がしたというなどは、新しい奇事ながら無数に村々で話がある。狐狸が真似をすると説明せられ、或は狸は馬鹿だから、本物の汽車と衝突してとうとう死んだなどと云う噂までもある。即ち別に一人の統率者が無い場合にも、強い因縁さえあれば多人数の幻覚が一致をする。現代の個人はめいめい勝手次第の、生存を巧んで居るつもりで居るか知らぬが、流行や感染以上に昔からの隠れた力に、実はまだ斯うして折々は引廻されて居るのである。

五

だから大正十五年以後にも、斯んな出来事はなお絶無を期し難いと思う。福島県の箭内名左衛門氏は、地方の先覚であり新知識であるが、前年自分が彼村を訪ねたとき、斯う云う話をしてくれた。此附近には三十年か四十年に一度、必ず一人の異人が出現する。其威力の絶頂に在る間は、呪術も予言も悉く適中して、如何に本人の元の身分を熟知した者でも、帰依渴仰せざるを得なかつた。但し一年もたつうちには靈験が衰えて、多くは気付かぬ

間に何処へか往つてしまふそうである。始めて斯う云う異人が人に認められるのには、殆ど一定した形式があつた。若干の微弱な前兆の後に、突如として物憑ものつきの相を示して、屋根の上に飛んで上る。そうして棟の端に馬乗りに跨またがつて棟木をつかまえて押動かすと、どんな大きな土蔵などでもぐらぐらと揺いだと云う。之を集まり見た衆人は、もう其力を疑うことを得なかつたので、物理学の法則からは有り得べからざることを承知して居るが、現に多数が其事実を認めただから、争うことが出来ぬと云うことになつて居たという。

昨年こぞの初夏には、又自分は陸中の黒沢尻から、羽後の横手の方へ通ろうとして居た。和賀川の左右の岸に、此辺特有の東向き片破風かたはふの茅葺かやぶきの農家が、草木の茂みから処々にその寂しい姿を見せて居る。汽車の窓を開いて同行の阿部君が、其一個を指点して謂うには、あの家には二二ヶ月前から、大そうよく当る占うらない者が出ました。毎日のように遠方から、見てもらいに來る人が今でもありますと云う。まだ若い女房である様子であつた。此地方あた一帯には至つて多い例で、時としては同時に五人三人と輩出たぐひだして、力を競わねばならぬ場合さえあつた。固もとよ

り尋常の田に働く女であつて、東北でよく聞くモリコ又はイタコの如く、修行と口伝とを必要とする職業の巫女みことは別であつた。従つて最初何等かの奇瑞きざいの、先ず周囲の人々を驚かすものが無かつたならば、世間が此の如き神姥かみうばの出現を知る機会は無いのである。ところが平生はそつち無い物言いをして、人の前では碌ろくに眼も見合さぬ兄や夫が、実は潜ひそかに家の女性の言行に対して、深い注意を払つて居たのであつたことが、こんな異常の場合になるとすぐに露顕する。通例将まさに靈の力を現わさんとする女は、四五日も前から食事が少なくなる。眼の光が鋭

くなる。何かと云うと納戸に入つて、出て来ぬ時間が多くなり、それからほつぽつと妙な事を言い出すのである。不断から稍々^{やや}陰鬱な、突詰めて物を考えるたちの女ならば、折々は家族の物の早まった懸念の為に、幾分此状態を促進することも無いとは言われぬ。そうで無くても産の前後とか、其他身体の調子の変り目に、此現象の起りがちであるのを、やはり新しい医学の理論などに頓着無く、全然別様の神秘なる意義を彼等は付与したのである。だから世間も勿論此類の風説に決して冷淡では無かつたのだが、しかし第一次の固い信徒は、如何なる場合にも

必ず家族中の男子であつた。

と謂うよりも神憑きを信じ得ない家には、神憑きの発生することは決して無かつた。大和丹波市の近世の巫女教の如き、其随従者は之を天下に布しかんとする意気込をもつて居るが、其発端に於ては何れも小規模なる家庭用であつた。昔は個々の家庭に於て、神に問うべき問題が今よりも遥かに多く、寧ろ求めて家の婦人を発狂せしむる必要すらもあつた。しかも宿る神は八百万やおよろずで、正邪優劣の差が著しく、宿主の願うままにもならなかつたので、ここに儀式や禁忌のやかましい条件が案出せられ、成る

べくは人間の生活に便宜なる貴い訪問者を、選択しようとしたのである。

我々の民族の固有宗教は、正しく此点に於て、二筋に分岐し、末々別途の進展を遂げた。家と家、部曲と部曲の競争に於て、優れたる巫女の力に由り、最も尊く且つ正しい神を、御迎え申すことを得た家は、一門の繁栄と附近住民の信服が思いのままであり、此に助けられて男子の事業が成功すると共に、信仰も亦次第に統一せられたが故に、祭祀は其中心家族の事業と為^なつて、劣つたる神を持つ家々では、最早之に向つて各自個々の勧請をせ

ぬようになつた。しかも単に積極的に名を指して神を迎える風が止んだと云うのみで、婦人が靈に憑かれる習性までは絶やすことは出来ず、却つて以前に増して飢えたる靈、憤る神の如き遙かに階級の低い神靈が、招かざる賓客ひんきやくとして時々尋常の家を訪おとうことを、如何ともし得なかつたのである。公認せられた神道から見れば、言うまでも無くそれは邪神ではあつたが、家としてはなお古い親しみもあつて、敬して之に仕えたのみか更に其恩顧を利用せんとさえした。例えば狐の精、蛇の精というが如き低い神でも、其靈が人間以上なる限り、之を饗し之

を礼すれば冥助めいじよが有り、之を怒らしむれば其罰は中々に正しい神よりも烈しかった。家々の祖先の霊、又は住地と縁故の深い天然の諸精霊の如きは、仮に之を避け退ける方法があつても、無情に之を駆逐するに忍びなかつた。況いわんや彼等との間に立つて、幹旋し通訳するの任務が、主として細心柔情にして能く父兄を動かすに力ある婦人の手に在つたのである。是れ日本人の家の宗教の、久しく元の形を崩されつつも、なお其破片を保存せられた所以ゆえんであつて、同時に又新しい色々の迷信の相次いで興隆した所以でもある。

六

我々が今読んで居る歴史と云うものの舞台には、女性の出で働く数は甚だしく少なかつたが、表面に現われた政治や戦争の事業にも、隠れて参加した力は実は大きいのであつた。そういう心持を以て再び前代の家庭生活を眺めて見ると、久しく埋もれて居ただけに、なつかしい民族心理の痕が際限も無く人の心を引く。但しなつかしいと云うことは、必ずしも其昔に戻れと云うことを意味

しない。そんな面倒な拘束に今更従わねばならぬ必要は無いのみか、我々の名づけて古風と云うものにも、上古以来何度か時勢の影響の著しいものがあって、結局はどれが信仰の原の型と名づくべきものを、指示することも出来なくなるのに、徒いたずらに是に追隨する理由は無いからである。

それでも歴史を辿たどって行くと、我々が便宜の為、又此信仰の変遷の標準を掲げる為に、仮に名づけて玉依彦・玉依姫の世と称するものはある。此二柱の神は人も知る如く、賀茂の神人の始祖であり、同時に又上の社の御神

の、御母と御伯父である。曾かつては人間の処女の心姿共に清き者の中から、特に年若く未だ婚とつがざる者のみを点定して、神の尊き霊が御依りなされし時代があった。他の多くの旧社には永く此例を遵守する者もあつたが、此場合には必ず代々の兄の家が神職を相続して、大工のジヨセフよりも今一段と自然なる保護と奉仕とに任じ、又その御神の力を負うて、附近の部曲に号令することを得たのであつた。即ち人界に在つては藤原氏が、久しい年代に亘つて力と頼んで居た、外戚の親に該当するものである。兄弟の縁は見ように由つては、父子の続きよりも確

実である。今もし天つ神が大昔の母系の血筋を重んじたまい、且つ女性の純潔を要求したまうとすれば、斯うした結合に由つて叔母から姪女へ、奉仕の職を伝えるの他は無い。神巫の家筋は何れの社でも、皆斯うして保存せられた。後次第に年限を定めて、年たけて夫を持つことを許され、或は必ずしも処女なることを要せぬようになつたのみである。伊勢の内外宮に於て物忌ものいみのちち父と呼び、越前飛騨等の或旧家でテテと称するものも、尚この玉依彦思想の第二次の延長であると見られる。

此の如き兄妹の宗教上の提携の、如何に自然のもので

あつたかは、遠近多種の民族の類例を比べて見てもわかる。近くはアイヌの昔物語に於ても、最近金田一氏の訳出せられた伝説に依れば、処々の島山に占拠した神は、必ず兄と妹との一組にきまつて居た。沖縄は固より我民族の遠い分れで、古い様式を保存し得る事情はあつたが、是亦御岳の神々は男女の二柱であつて、其名の対偶より判じて見ても、我神代卷の最初の双神と共に、本来同胞の御神であつたことが想像せられる。斎院が神を祭る慣習も彼島には近世まであつた。元は一々の旧家名門に、各々小規模の玉依姫が定められて居たことは、現在まだ

疑う余地の無い痕跡が存して居る。内地に於ては祝神主の男子が、政治の必要から次第に巫女の家を抑制したに反して、彼に在っては今も祭祀が婦人に独占せられて居る。其上に重要な祈願に於ては、もとは屢々「おなり神」を拝する習があつた。即ち妹の神女を仲に立てて神の霊に面することであつて、オナリは島々に於ては現に又我々の謂う姉妹を意味して居る。同じ語とおぼしきものが内地で用いられるのは、ただ田植の折の田の神の祭のみであるが、其任務の極めて神聖に、且つ家々の生活にとつて最も重要であつたことは、歌曲と口碑の中から

も之を窺うことが出来る。

簡単に話を運ぼうとした為に、却って註脚の必要な部分が多くなつたが、自分は之に由つてむつかしい学問上の論断を下そうとするのでは無い。新しい時代の家庭に於ては、妹の兄から受ける待遇が丸で一変したように見えるけれども、今後とても女性の社会に及ぼす力には、方向の相異までは無い筈である。もし彼女たちが出でて働こうとする男子に、屢々欠けて居る精微なる感受性を以て、最も周到に生存の理法を省察し、更に家門と肉身の愛情に由つて、親切な助言を与えようとするならば、

惑いは去り勇氣は新たに生じて、其幸福はただに個々の小さい家庭を恵むに止まらぬであろう。それには先ず女性自身の、数千年来の地位を学び知る必要が有る。之を我々のような妹を持たぬ男たちに、一任して顧みないのはおかしかつたと言い得る。人間の始めたことに本来意味の無いことは有り得ないのに、之を迷信などと軽く見てしまつて考えて見ようともしなかつたのは、同情の無い話であつたと云うことを、改めて新しい時代の若い婦人たちに説いて見る必要があると思う。

日本文学電子図書館

妹の力

著 者：柳田国男

制作者：宮澤一郎

底 本：「昭和文学全集 4」
小学館

平成元年4月1日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館